

昭和五十九年

日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和五十九年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。
一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録 Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。
ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著書名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

日本思想史入門

日本思想史叙説 2

講座日本思想

4 時間

5 美

歴史科学大系
思想史近現代 20

日本女性文化史

日本人の死生観

昭和史学史ノート

現代と古代史学

柴田実著作集

1 日本庶民信仰史
俗篇 民

2 日本庶民信仰史
教篇 仏

3 日本庶民信仰史
道篇 神

日本民俗文化大系

第9巻 曆と祭事

第10巻 家と女性

相良 亨 編 ペリかん社
竹内 整一他編 ペリかん社
相良 亨他編 東京大学出版会

歴史科学評議会 校倉書房

五十嵐 富夫 吾妻書館

相良 亨 ペリかん社

齊藤 孝 小学館

吉田 晶 校倉書房

柴田 実 法蔵館

網野 善彦他編 小学館

古 代

古代の日本海諸地域

その文化と交流 シンポジウム

平安文化史論

神道古典の研究

日本の古典籍と古代史

記紀神話の成立と古代史研究選書

日本書紀成立論序説

日本古代の氏族と祭祀

日本古代の王権と祭祀と歴史学選書7

元三慈恵大師の研究 千年遠忌記念

和泉式部 人物叢書一八四

空海 生涯と思想

天台密教の形成 日本天台思想史研究

日本仏教史論集

4 弘法大師と真言宗

森浩一編 小学館

目崎 徳衛 桜楓社

池山 聰助 国書刊行会

丸山 二郎 吉川弘文館

三宅 和朗 吉川弘文館

横田 健一 塙書房

阿部 武彦 吉川弘文館

井上 光貞 東京大学出版会

叡山学院編 同朋社出版

山中 裕 吉川弘文館

宮坂 宥勝 筑摩書房

木内 堯央 溪水社

吉川弘文館

和多 秀元編 高木

中世

法と言葉の中世史(平凡社選書八六)

中世思想史への構想

歴史・文学・宗教(さみっと双書)

日本中世への視座

風流・ばさら・かぶき

法然浄土教の総合的研究

法然上人の思想と生涯

教行信証成立史考

親鸞の語録を読む

親鸞のひらいた地平 増補

日本仏教史編集

9 日蓮聖人と日蓮宗

10 一遍上人と時宗

一遍―念仏の旅人(二遍会双書 第9集)

正法眼蔵

有時・諸悪莫作を味わう

石鎚山と修験道

里修験の研究

笠松 宏至 平凡社

大隅 和雄 名著普及会

守屋 毅 日本送放出版協会

竹中 信常 山喜房仏書林

水谷 幸正 編

仏教 大学 編 東方出版

宮井 義雄 法蔵館

市川 良哉 永田文昌堂

二葉 憲香 永田文昌堂

中尾 堯 吉川弘文館

渡辺 宝陽 編

橘 俊道 編 一遍会

今井 雅晴 編 一 遍 会

越智 通敏 柏 樹 社

内山 興正 柏 樹 社

西海 賢二 名著出版

宮本 袈裟雄 吉川弘文館

近世

江戸時代における中国文化受容の研究

近世日本の思想像

世界史的考察

江戸人の昼と夜

日本思想史への試論 一九七九年

岡田章雄著作集

1 キリシタン信仰と習俗

2 キリシタン風俗と南蛮文化

5 三浦按針

6 南蛮随想

近世庶民の意識と生活

陸奥国農民の場合

史料研究雪窓宗崔

禅と国家とキリシタン

良寛の偈と正法眼蔵

本居宣長と鈴屋社中

宣長と秋成

近世中期文学の研究

荻生徂徠年譜考

富永仲基研究

大庭 脩 同朋舎出版

松本 三之介 研文出版

野口 武彦 筑摩書房

日本思想史研究会編 愛知教育大学日本思想史研究会

岡田章雄 思文閣出版

布川清司 農山漁村文化協会

大桑 齊 同朋社出版

中村宗一 誠信書房

鈴木 淳他 綿正社

日野 竜夫 筑摩書房

平石直昭 平凡社

梅谷 文夫 和泉書院

水田 紀久夫 和泉書院

叢書・日本の思想家

11 中村惕斎・室鳩巢

14 三宅観瀾・新井白石

25 井上金峨・亀田鵬斎

緒方洪庵と適塾生―「日間
瑣事備忘」にみえる

松陰の教学と杉家
(松陰教学シリーズ1)

幕末教育史の研究 2
諸術伝習政策

近代

近代日本思想史序説

『夜明け前』の実像と虚像

明治維新と近代化―現代日
本を産み出したもの
(小学館創造選書六一)

明治維新教育史

明治四年のアンバサドル
岩倉使節団文明開化の旅

天皇親政―明治期の天皇観
日本の近代―国家と民衆

西郷隆盛の人と思想

志士と官僚―明治初年の
場景―歴史と日本人9

明德出版社

柴田 朝 篤

新藤 英 幸

倉本 栄 治

梅 溪 昇

松 風 会 編

倉 沢 剛

森 一 貫

芳 賀 登

桑 原 武 夫

井 上 久 雄

泉 三 郎

坂 田 吉 雄

安 在 邦 夫

満 江 巖

佐々木 克

福沢諭吉(河出人物読本)

土佐の自由民権

自由民権革命の研究
(叢書・歴史学研究)

蘇峰徳富猪一郎

国民文化の形成

自由民権・静岡事件

民権百年―その思想と運動

民衆史の発見

近世民衆史の再構成

民衆ジャーナリズムの歴史
―自由民権から占領下沖
縄まで

日本近代化の諸相

近代日本とアジア―文化の
交流と摩擦―国際関係論
のフロンティア2

日韓近代史の空間―明治ナ
ショナリズムの理念と現
実

戦後日本の大衆文化史―一
九四五―一九八〇年

政治のことば―意味の歴史
をめぐって

河出書房新社

外崎 光 広

江村 栄 一

安藤 英 男

飛鳥井 雅道編

原 口 清

色 川 大 吉

佐々木 潤之介

門 奈 直 樹

梅 溪 昇

平野 健一郎編

韓 相 一

鶴 見 俊 輔

成 沢 光

高知市民図書館

法政大学出版局

近藤出版社

筑摩書房

三一書房

日本放送出版協
会

朝日新聞社

校倉書房

三一書房

思文閣出版

東大出版会

日本経済評論社

岩波書店

平凡社

II 雑誌・紀要論文目録

総 雑

思想史研究の方法について	森田 康之助	国学院雑誌 八五—一
思想研究にみる比較—国際 理解のための一つの試み	吉田 龍恵	彦根論叢二二五
論理から国家へ	上山 春平	思想 七二二
古事記序文観の変遷	早川 万年	日本思想史学 一六
日本における仏教と世俗— 優婆塞・優婆夷	二葉 憲香	日本仏教史研究 五
日本禅宗史における達磨宗 の位置	船岡 誠	宗学研究 二六
吉備津神社における神仏習 合と分離について	藤井 駿	瀧川政次郎先生 米寿記念論集刊 行会編『神道史 論叢』
群馬の天王（祇園）信仰に ついて	金子 緯一郎	群馬県史研究 一九
僧の忠節	笠松 宏至	月刊百科二五五
常陸における浄土教	菊地 勇次郎	研究論集（大正 大・院）八
日本キリスト教史の研究方 法	土肥 昭夫	基督教研究 四六一—
日本人の精神史の中の「切 支丹」考—上・中・下	水林 澄雄	論叢（明治学院 大）三五四 三六四・三六八

世界の中の日本—日本人は
世界の中で日本をどう捉
えてきたか

古 代

比較古代政治思想論—世界 政治学史の前提—上・下	南原 一博	九一—一、二、 三、四
日本神話の海洋性と農耕性	戸田 秀典	研究論集（関西 外大）四〇
津田左右吉氏の古代帝系譜 考察について	時野谷 滋	大倉山論集一六
帝紀論の可能性（古事記と 日本書記—いま何が問題か —記紀の再検討）	川口 勝康	国文学 解釈と 教材の研究二九
記紀の世界と八世紀の学問 （〃〃）	鬼頭 清明	〃
記紀と「中華思想」—東ア ジア史的視点（古事記と 日本書記—いま何が問題 か—記紀・新しい視点か ら）	酒寄 雅志	〃
記紀と地域国家—地域国家 論的視点（〃〃）	門脇 禎二	〃
記紀系譜記事の対比的考察	梅沢 伊勢三	古事記年報二六
古事記の本旨—比較文献学 からの一考察	藤井 信男	大倉山論集一六
神話と祭り—高天の原の鎮 魂と地上の鎮魂	倉林 正次	『神道史論叢』
降臨伝承の再検討	上田 正昭	岸俊男教授退官 記念会編『日本 政治社会史研 究』上

古事記神武天皇成婚伝承―
「一宿御寝坐也」を中心
に

青木周平

紀要(国学院大
・日本文化研
五三

神武伝説の成立

広畑輔雄

史林 六七―三

『続日本紀』の編纂過程

森田悌

日本歴史四三〇

『続日本紀』にあらわれた
孝の宣揚について

笠井昌昭

文化学年報(同
志社大) 三三

日本文徳天皇実録編纂過程
の研究

松崎英一

竹内理三先生喜
寿記念論文集刊
行会編『律令制
と古代社会』

祈年祭の祝詞の問題点 上

尾崎暢映

学苑五 三四

出雲国造神賀詞の末段につ
いて

青木紀元

神道古典研究会
報 六

家伝をめぐる家の用法につ
いて

関口裕子

土田直鎮先生還
曆記念会編『奈
良平安時代史論
集』上

神宮の創祀について

田中卓

神道宗教一一五

諸国一宮の祭神

溝口睦子

『五味智英先生
追悼・上代文学
論叢』

三輪君氏と三輪山祭祀

佐々木幹雄

日本歴史四二九

古代国家と宗像の神

岡田精司

古代を考える
三七

古代出雲の神社について

石塚尊俊

神道古典研究会
報 六

住吉大社と津守氏

落合偉洲

国学院雑誌
八五―五

草創期における石清水八幡
宮―その創立と発展の背景

野尻靖

紀要(明治大・
院) 二一―四

平野社の成立と変質

義江明子

日本歴史四二九

日吉社の創祀とその発展

景山春樹

神道古典研究会
報 六

吉田卜部氏の発展

岡田莊司

『神道史論叢』

神仏習合研究史ノート―発
生論の素描

林 淳

神道宗教一一七

大祓研究序説―養老の「神
祇令」を通路として

三橋 健

『神道史論叢』

古代における星辰図につ
いて―高松塚の星宿図を中心
に

網干善教

『檀原考古学研
究所論集』

△天罡▽呪符の成立―日本
古代における北辰・北斗
の受容過程をめぐる

増尾伸一郎

信濃三六一―二

陰陽道祭祀の成立と展開

岡田莊司

紀要(国学院大
・日本文化研)
五四

平安時代の卜占

加納重文

研究紀要(京都
女学園・仏教文
化研) 一四

奈良朝廷の忌齋―わが国に
おける忌日・周忌の起源

高島正人

『神道史論叢』

宮中儀礼に於ける獅子狛犬
成立の思想

上杉千郷

〃

古代動物供儀祭祀とその背
景

笹生 衛

神道宗教一一四

古代都市社会における八歌
垣▽の変容

増尾伸一郎

立正史学 五六

日本古代における婚姻・集
団・禁忌―外婚制に関わる
ノート

吉村武彦

『奈良平安時代
史論集』上

文書と机と告朔儀礼―その序説	新川 登亀男	史冊 二五	日吉社の神宮寺―神仏習合とその展開	嵯峨井 建	神道学 一二一
帰化人の服属儀礼・その形成と意義―東・西文忌寸部の呪詞をめぐって	湯川 久光	上代文学 五二	平安初期における神仏習合の展開―民衆の仏教受容	中川 修	竜谷大学仏教文化研究所紀要 二二二
日本と韓国の祖先崇拜	檜 垣 巧	密教文化一四五	慈恵大師の因明学とその系譜	根 無 一 力	研究紀要(叡山学院) 六
山陵奉幣に関する一考察	西牟田 崇生	『神道史論叢』	慈恵大師の観経観―天台観経疏と比較して	福 原 亮 巖	〃
祈年祭奉幣制度の衰退	熊谷 保孝	〃	九品往生義と往生要集	福 原 蓮 月	〃
東方信仰と稲―敏達天皇紀にあらわれた道慈の仏教信仰を中心に	渡部 眞弓	国学院雑誌 八五―八	『観経』の下品と源信の下品―源信における經典的・經驗的信仰をめぐって	宮 敏 子	文化(東北大学文学会) 四七
行基伝の成立と民衆の行基崇拜―『続日本紀』と『日本靈異記』の場合	中川 修	『民衆と仏教(古代・中世編)―日本仏教史研究 5』	慶滋保胤にみる浄土教受容の側面	藤 本 佳 男	竜谷大学仏教文化研究所紀要 二二二
律令制下の村落社会における仏教受容―春時祭田条との関連をめぐって	宮 城 洋一郎	竜谷大学仏教文化研究所紀要 二二二	古代における母性と仏教	勝 浦 令 子	季刊日本思想史 二二二
南都仏教における最澄の仏教	安 部 宏 一	史報 六	『風土記』世界の再構成のために	関 和 彦	歴史評論四〇九
神道と日本仏教との接点に關する覚書―空海と道元とを中心	渡 部 眞 弓	神道学 一二三	聖徳太子説話の生成と展開―片岡遊行説話の変遷を中心として	松 尾 雅 裕	紀要(国学院大・院) 一五
日本における仙の真言密教的特質―久米仙説話を素材として	柴 田 潔	文化史学 四〇	「聖徳太子飛翔説話」成立序説―「甲斐の黒駒」と「夢殿」をめぐって	堀 越 光 信	国学院雑誌八五
古代薬師信仰の変遷―仁明朝を中心として	西 尾 正 仁	御影史学論集九	『扶桑略記』撰者考	〃	皇学館論叢 一七―一六
初期神宮寺と仏舍利信仰―塔の造営をめぐっての一試論	竹 居 明 男	文化学年報(同志社大) 三三三	『年中行事秘抄』の成立	所 功	日本歴史四三七
			法隆寺釈迦三尊の史料批判―光背銘文をめぐって	古 田 武 彦	仏教史学研究 二六―二

上代彫刻にみる造願意識の
変遷 田中 嗣人 季刊日本思想史 二二三

日唐律令における君主の称
号について 川北 靖之 『神道史論叢』

壬申紀における湯沐令につ
いて 樋口 兼其 神道学 一二一

日本における仏教「制度化」
の始源―「推古朝僧官」を
めぐる問題 平野 不退 『日本仏教史研
究』 五

僧官から見た国家仏教の一
側面について―統制機構成
立過程を中心に 藤田 かおる 史学論集(駒沢
大) 一四

平安初期南都仏教と護国体
制―延暦25年新年分度者制
の意義 曾根 正人 『奈良平安時代
史論集』下

古代方位信仰と地域計画―
磐座(石蔵山)信仰と平
泉居館集落の計画理念 山田 安彦 地理 二九

都市計画の思想―平安京の
方位神を中心として 後藤 文利 商経学叢 三一

古代寺院における所有権思
想の発達 鶴岡 静夫 古代文化史論攷 五

藤原良房政権下の神祇
藤原良房政権下における神
仏習合の進展(一) 熊谷 保孝 神道宗教一一六
政治経済史学 二二二

文書行政上における膳勅符 早川 万年 続日本紀研究 二三四

古代天皇制と非革命の哲学 伊藤 益 倫理学(筑波大
・倫理学原論 二二)

古代東国と大和政権―多摩
における伝統意識を尋ね
て 中野 藤吾 明星大学経済学
研究紀要 一五

吉田孝著「律令国家と古代
社会」 吉田 晶 史学雑誌 九三―七

倉林正次著「天皇の祭りと
民の祭り―大嘗祭新論」 真弓 常忠 国学院雑誌 八五―一

田中嗣人著『聖徳太子信仰
の成立』を読む 林 幹 彌 日本歴史四三二

林幹彌氏の拙著『聖徳太子
信仰の成立』批判にお答え
する 田中 嗣人 日本歴史四三七

川副武胤著「日本古典の研
究」の刊行によせて 工藤 雅樹 歴史(東北史学
会) 六三

林田孝和著「王朝びとの精
神史」 日向 一雄 国語と国文学 六一

堀池春峰著「南都仏教史の
研究(上・下)」 永村 真 仏教史学 二六

中 世

鎌倉武士の道徳―その人間
像の変遷に関わって 竹内 明 仏教大学研究紀
要 六八

常陸における北畠親房(2) 神沢 惣一郎 早稲田商学 三〇五

北畠親房の思想と伊勢神道 白山 芳太郎 皇学館論叢 一七―六

北畠親房の神道観 〃 神道史研究 三二―四

義『二十一社記』の成立の意 〃 紀要(皇学館大) 二二

二十二社本縁成立考	白山 芳太郎	神道宗教一四	明恵上人の「夢の記」—解	Frédéric Girard	思想 七二一
建武中興と伊勢—とくに北 畠親房	平泉 隆 房	神道史研究 三二—四	親鸞思想の歴史的 성격	赤松 徹 真	『日本仏教史研 究』五
神話伝承の心と鎌倉新仏教	森田 康之助	神道学(出雲復 刊) 一二三	親鸞の来迎・臨終正念觀を めぐって	市川 浩 史	文芸研究一〇六
早良親王御霊その後—中世 荘園村落の崇道社の性格 をめぐって	牛山 佳 幸	『律令制と古代 社会』下	親鸞と海夫	河田 光 夫	真宗研究 二八
安居院と東国—原神道集の 成立をめぐって	福田 晃	中世文学 二七	親鸞における空	佐藤 正 英	理想 六一〇
伊勢神道と末法思想	高橋 美由紀	『神道史論叢』	親鸞聖人における太子信仰 の特質	武田 賢 壽	真宗研究 二九
中世神道思想と外来思想	安蘇谷 正 彦	季刊日本思想史 二二	真宗と神祇—親鸞の外道觀 を通じて	中根 和 浩	日本仏教 六〇・六一
熱田社と草薙劍からみた三 種の神器成立の一側面	吉田 研 司	『律令制と古代 社会』上	親鸞教学の歴史像—とくに 「神祇觀」を中心に	間島 憲 仁	仏教史研究 一九・二〇
念仏運動と民衆	藤本 佳 男	『日本仏教史研 究』五	親鸞と蓮如の信仰構造—そ の思想的対比	山崎 龍 明	真宗研究 二八
中世における陣僧の系譜	今井 雅 晴	人文論集(茨城 大・人文)	「正法眼蔵」における「神」 の意義—中国上代思想の 「神」との関連において	大谷 哲 夫	北海道駒沢大学 研究紀要 一九
金沢文庫の浄土教資料—特 に『選択集述疑』を中心 として	浅井 成 海	金沢文庫研究 二七三	道元と如浄—10—「如浄禅 師語録」—到来を中心に	伊東 洋 一	文経論叢(弘前 大・文学部) 一九—三
皮聖行円の宗教活動の特資	勝浦 令 子	『奈良平安時代 史論集』下	天台座主慈源と青蓮院	高木 葉 子	政治経済史学 二二—二
隆寛作「法然上人伝」に関 する若干の問題—特に浄華 院と一枚起請文をめぐっ て	中井 真 孝	人文学論集(仏 教大)	鎌倉名越の日蓮の周辺	高木 豊	金沢文庫研究 二七二
重源と浄土堂・大仏	五味 文 彦	日本歴史四三六	日蓮聖人遺文に見られる 「逆罪」について	原 慎 定	日蓮教学研究所 紀要 一一
明恵における信の解釈	柴崎 照 和	仏教学会報(高 野山大)	一遍と神仏習合	橋 俊 道	日本仏教 六〇・六一

静照の往生思想

奈良 弘元

日本大学人文科
学研究所研究紀
要 二九

龍谷大学論集
四二四

覚如における信の思想—真
宗教学史における信解釈
の問題

信 楽 峻 磨

龍谷大学論集
四二四

中世祭祀論の—典型—花園
天皇『誠太子書』とその
祭祀論

小 島 鉦 作

『神道史論叢』

中世禅宗と神仏習合—特に
曹洞宗の地方的展開と切
紙資料を中心にして

石 川 力 山

日本仏教
六〇・六一

中世真宗における神祇観の
推移談義本を中心に

柏 原 祐 泉

〃

民衆仏教と真宗—真宗の再
吟味

山 崎 龍 明

日本仏教史研究
五

蓮如の社会倫理思想—その
価値観からの考察

嬰 木 義 彦

真宗学 七〇

三条西実隆覚え書—宗教的
教養について

白 井 忠 功

論叢（立正大
文） 七九

栄花物語の歴史叙述—「今」
の表現性をめぐって

福 長 進

国語と国文学
六二—七

往生伝の漢風と国風

大 曾 根 章 介

国文学解釈と鑑
賞 四九—一一

「因縁」と「譬喩」と—説
話の原点をさぐる

山 田 昭 全

〃

「梁塵秘抄」における仏伝
歌謡考

黒 部 通 善

愛知学院大学論
叢—一般教育研究
三一—三・四

中世日本人の時間意識—
「新古今集」における
時間意識

平 野 仁 啓

文芸研究（明治
大学文芸研究
会） 五一

和光同塵の思想と「愚管抄」
—古代における仏教日本
化の軌跡

石 田 一 良

季刊日本思想史
二二

「愚管抄」における「口伝」
の意味

尾 崎 勇

表現研究 三九

「平家物語」の八仏法V序
論—天台座主明雲の叙述を
めぐって

平 野 さつき

国文学研究（早
稲田大・国文学
会） 八三

今昔物語集本朝仏法伝来史
の歴史叙述—三国意識と自
国意識

前 田 雅 之

〃 八二

「発心集」の仏教思想—鴨
長明のめざしたもの

長 嶋 正 久

仏教文化研究所
研究紀要 一四

「発心集」の時代意識

野 村 卓 美

国語と国文学
六一—一二

中世人の美意識とモラル—
佗びについての再論

数 江 教 一

中央大学文学部
紀要 一一三

「文明—統記」考（遺稿）

原 田 行 造

金沢大学語学・
文学研究 一三

めでたさの構造—「養老」
の世界

菅 野 也 寸 志

季刊日本思想史
二四

美と超越の世界—「田村」
の思想的特質

山 内 春 光

〃

能における他界観と呪術の
意味—「敦盛」をめぐって

高 島 元 洋

〃

彼岸と此岸の狭間—「実盛」
の景物について

村 上 隆

〃

「井筒」にみるいにしへの
構造

上 田 哲 之

〃

孤愁の歌と心—「関寺小町」
のシテをめぐって

土 井 広 子

〃

能の終焉―「藍染川」と「水無瀬」の世界 鳥居明雄 季刊日本思想史 二四

「姥捨」の孤絶 相良亨 //

「求塚」―あはれの行方 八木公生 //

中世の法と法書 棚橋光男 日本政治社会史研究 中

中世の百姓と地頭支配―鎌倉幕府追加法第二六九条をめぐって 中野栄夫 日本歴史四三四

元亨元年革命定文について (補遺・覚書) 佐藤均 国書逸文研究 一三

『竹むきが記』にみる家意識―南北朝期の女性の一例 今関敏子 『女性と文化』 三

南北朝の正閏と天皇論 藤原石山 南朝史学会(愛知)八四―一二

後醍醐天皇討幕の御志の由来―龜山法皇および後宇多法皇との関係について 平田俊春 神道史研究 三二―四

下総結城における中世領主勢力の展開と寺院―結城氏と禅宗を中心に 大久保仁 花園史学 五

加賀一向一揆の成立について 遠藤一 龍谷史壇 八五

形成期一向一揆における一民衆像―菅生願性とその周辺 〃 『日本仏教史研究』 五

越中一向宗教団の成立と構造 金龍静 仏教史学 二六―一

一向一揆と民衆 新行紀一 日本史研究 二六六

戦国期三河本願寺門徒団における「一向一揆」 中野和之 仏教史研究 一九・三〇

萩原龍夫著『巫女と仏教史』 蘭部寿樹 日本仏教 六〇・六一

萩原龍夫著『巫女と仏教史―熊野比丘尼の使命と展開』を読む 千葉徳爾 駿台史学 六一

高木豊著『鎌倉仏教史研究』 佐藤弘夫 仏教史学 二七―一

重見一行著『教行信証の研究』 古田武彦 //

北西弘著『一向一揆の研究』 藤木久志 仏教史学研究 二六―二

近世

「秀吉の平和」と武士の変質―中世的自律性の解体過程 高木昭作 思想 七二―

近世の法と国制研究序説補論(2)―山本博文「日本近世国家の世界史的位置」によせて 水林彪 人民の歴史学 七九

水林彪「近世の法と国制研究序説」について―水林・山本論争の基本性格 中小路純 人民の歴史学 八二

江戸時代の自然と人間 鬼頭宏 ソフィア(上智大) 三三―二

思想の普遍性と歪曲―近世日本における儒教的徳目の場合 高尾利数 法政大学教養部 紀要 五〇

徳川初期における「忠」と「孝」の観念
研究報告(東北大・日本文化研) 二〇〇

熊沢蕃山の農兵論と歴史認識
長島光二 史観 一一一

『義臣解難』小論―赤穂浪士討入り事件をめぐる論争史のために
幕末における国家概念について

熊沢蕃山と神道および「社家神道」
熊沢蕃山と太宰春台
山鹿素行の学校論に関する考察―5―
京都町衆伊藤仁斎の生活規範―日記の分析を通じて

林羅山の神社縁起について
石川丈山年譜稿―上―(3)

熊沢蕃山と神道及び神道史
日本歴史四三五
明星大学研究紀要 二〇〇

山崎闇齋と『白鹿洞書院揭示』
『關異』と『周子書』―その成立の意義

伊藤仁斎の「王道」論
川口浩 史学雑誌 九三―一二

「神は天地の心」・「心は神明の舎」―「会津神社志序」にあらはれてゐる山崎闇齋の神の理解
浅見綱斎「心ナリノ理」をめぐって

徠徠学の原型―『孫子国字解』の思想
仁齋學批判にみる徠徠學の構造―護園隨筆を中心として

野見嶺南の神道研究―土佐における垂加派の一展開
藤樹思想における宗教性―「翁問答」まで
中江藤樹と陽明学―誠意説をめぐって

「護園録稿」成立に関する一考察―南郭・春台の対立をめぐって
西川如見の商業思想
新井白石の「鬼神論」
白石と風土記

熊沢蕃山のキリシタン論
熊沢蕃山と「宇佐問答」―仏教観を中軸として

新井白石の「古史通」概考
新土手簡年次小考―白石と門人土肥元成

研究報告(東北大・日本文化研) 二〇〇
調査研究報告(学習院大・東洋文化研) 一八
『アジア諸民族における社会と文化』
神道宗教一 一六
跡見学園女子大学紀要 一七
東洋文化 五三
神道史研究 三二―二

宮崎道生 神道及び神道史 四一
松野憲二 要 二〇〇
梅溪昇教授退官記念論文集刊行会編『日本近代の成立と展開』
史学雑誌 九三―一二

谷省吾
田尻祐一郎
小山内めぐみ
吉岡千秋
吉田公平

前田勉 日本思想史学 一六
倉田信靖 大東文化大学漢学会誌 二三
石本道明 東洋文化 五三
竹林庄太郎 論集(大阪経大) 二五九―二六一
中村春作 ユリイカ 一六―一八
池田久 皇学館論叢 一七―二

宮崎道生
国学院雑誌 八五―九
国学院大学紀要 二二

荒川久寿男 皇学館大学紀要 二二
皇学館論叢 一七―二

国学院大学紀要 二二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

皇学館論叢 一七―二

「柳子新論」の史料的一分
荒川 久寿男
史料(皇学館大) 七二

山県大弼の事跡の再検討—
『桑家漢語抄』の大弼写
本と詩二十一首の発見に
ふれて
平野 日出雄
芸林 三三一—

安藤昌益研究の展開—戦前
・戦中編
三宅 正彦
史林 六七—二

一八世紀後半の医学界と安
藤昌益
山崎 庸男
史学雑誌 九三一—

安藤昌益における記紀解釈
の特徴—「自然神道」とは
何か
萱沼 紀子
『五味智英先生
追悼・上代文学
論叢』

安藤昌益の論著「自然真営
道」における「真道哲学」の現
代の意義
野田 彦四郎
紀要(鈴鹿工専) 一七一—

安藤昌益論著「自然真営道」
における「大序卷」ならび
に「真道哲学」の現代的意
義
//
名古屋女子大学
紀要 三〇

中井竹山の歴史観—その排
仏論を中心として
小堀 一正
『日本近代の成
立と展開』

本多利明小論—福沢諭吉の
初期経済論との対比(続)
笹間 愛史
紀要(法政大・
教養) 五一

日本近世実学思想史と海保
青陵
埜上 衛
実学史研究 一

「日本政記」論贅所説の批
判的考察
高瀬 学
国士館大学政経
論叢 四八

「愛静館筆語」に見る幕末
二儒の頼山陽観
安藤 英男
法政史学 三六

広瀬淡窓の倫理思想
黒住 真
倫理学紀要(東
京大・文・倫理) 一

筆叢手簡—その考証学への
傾倒について
弥吉 光長
ビブリア 天理
図書館報 八三

佐藤一斎の思想と教育(Ⅱ)
山縣 明人
政治経済史学 二一七

津軽藩儒黒瀧藤太について
黒瀧 十二郎
国史研究 七七

大塩事件と洗心洞塾
海原 徹
大塩研究 一七

私塾・南明堂と大塩事件
中島 三佳
// 一八

吉村秋陽「讀我書樓長曆」
について
荒木 龍太郎
都城工業高等専
門学校研究報告 一八

楠本端山の學問と現代
岡田 武彦
斯文 八八

『大日本史』「論贅」の成
立過程
鈴木 暎一
茨城県史研究 五三

会沢正志斎の『新論』(3)
長尾 久
紀要(相模女大) 四七

会沢正志斎の排耶論につい
て
露口 卓也
文化学年報(同
志社大学文化学
会) 三三

幕末知識人の西欧認識—佐
久間象山と福沢諭吉を中
心として—1—
飯田 鼎
三田学会雑誌 七七—一

横井小楠における政治思想
の原点構造
檜原 孝俊
政治研究 三一

横井小楠の「仁」
八木 清治
日本思想史研究 一六

建武の精神と真木和泉守
小川 常人
芸林 三三一—三

吉田松陰の対アジア観
栗田 尚弥
政治経済史学 二一〇

地域特性と実学—上方を事例として
末中哲夫
実学史研究 一

古医方家・永富独嘯庵の医学修行論
立花均
日本思想史学 一六

近世本草学と国産薬種
宗田一
実学史研究 一

杉田玄白をめぐる人々
松崎欣一
史学 五四—一

信濃蘭学の展開状況—門人帳分析による基礎的研究
青木歳幸
実学史研究 一

出世移動型の蘭方医—吉田(豊橋)出身尾本涼海の場合
田崎哲郎
三河地域史研究 二

幕末期における一地方蘭医の軌跡について—吾妻郡横尾村の高橋景作の場合
田畑勉
地方史研究 三四—五

幕末の英学・開成所
斎藤篤司
紀要(東横学園女短大) 一九

幕府オランダ留学生—職方・山下岩吉
宮永孝
紀要(法政大・教養部) 五一

幕末明治の洋学者・渡部温(一郎)覚え書(2)
片桐芳雄
研究報告(愛知教育大・教育学部) 三三

幕末国学における洋学受容の一形態—長谷川昭道の場合
沖田行司
文化学年報(同志社大学文化学会) 三三

「上古封建」論と国学—近世史学思想史の一断面
高橋章則
日本思想史研究 一六

多田義俊の学問形成—家学の相伝と普及の問題
古相正美
日本文学論究 四三

賀茂真淵の思想—その「国の手ふり」論を中心に
鈴木暎一
『日本近世史論叢』(尾藤正英先生還暦記念会上編)

本居宣長における古道の理然
立川章次
史学論集(駒沢大) 一四

比較社会思想史研究(1・2)—日本思想の原型としての本居宣長の思想(1・2)
古賀勝次郎
早稲田社会科学研究所 二八・二九

初期宣長の思想形成—「古道」論を中心に
平石直昭
社会科学研究所 三五—五

本居宣長の「国造」制論とその思想的意味—宣長学考察の一視点
高橋章則
日本思想史学 一六

本居宣長の松坂学校創設案始末—八創国学校Vの系譜(2)
内野吾郎
紀要(国学院大・日本文化研究所) 五三

本居宣長の「遺言書」について
梅沢伊勢三
神道古典研究会報 五

鬼神・怪異・幽冥—平田篤胤小論
沼田哲
『日本近世史論叢』 下

篤胤講述本の文章史的性格—「悟道弁」と「古道大意」—
木坂基
研究論文集(佐賀大・教育) 三二

牛頭天王祭祀と平田篤胤
中村哲
法学志林 八一—三・四

草莽の国学—ある上州無宿の行動原理
中島明
地方史研究 三四—四

大原幽学への視角
柴田武雄
紀要(千葉敬愛短大) 六

地底の記録(二七)—明治・大正・昭和を生きる—大原幽学の生と死
石川猶興
農政調査時報 三三七

近世武家家訓における武士の職分
佐藤仁美
立命館史学 五

石田梅岩私新抄 (1・2・3・4)	木南卓一	論集(帝塚山大) 四二・四三・四四・四五	「なる世界」と「つくられる世界」―不干斎ハビアンの朱子学批判をめぐって	大島 晃	ソフィア 三三二―二
心学道話とコミュニケーション―道二心学を中心として	市村佑一	『日本近世史論叢』下	権現から大明神への道―地方式内社の近世史	新野直吉	『神道史論叢』
江戸幕府の学問吟味―武士階級の功利的学問観の形成に及ぼしたる試験制度の影響	橋本昭彦	教育学研究 五一―一	徳川家康崇拜の一例―第九子尾張義直の場合	田辺裕	『日本近世史論叢』上
寛政異学の禁の考察 (二)	大島英夫	紀要(明治大院) 二一―三	能登における東照宮の研究	小倉学	『神道史論叢』
昌平齋に遊学した加賀藩及び支藩の人々―弘化丙午以来昌平齋書生寮姓名録―から	ロバート・G・フラーシエム・ヨシコ・N・フラーシエム	地方史研究 三四―六	徳川義直の『神祇宝典』について	土岐昌訓	神道古典研究会報 六
江戸府内の諸学校と諸藩邸内学校	名倉英三郎	紀要(東京女大・比較文化研) 四五	江戸仏教の特質―五―その世俗倫理への接近	高神信也	智山学報 三三三
出石藩校弘道館について	竹木敬市	兵庫県の歴史 二〇	白隠における三教一致論	心山義文	国史学研究(龍谷大) 一〇
江戸時代の生活と文芸―その伝達と享受	今田洋三	短歌研究 四〇―二	近世初期禅僧の農民観	船岡誠	歴史論 七
「悪所」観とその形成―元禄文化論への一つの試み	守屋毅	日本史研究 二六〇	天桂伝尊再考―伝記とその思想	志部憲一	宗学研究 二六
キリシタン伝来とその対策について―豊臣秀吉の禁教令発布まで	細谷義秋	日本私学教育研究 所紀要 一九―一	近世念仏者と外来思想―黄檗宗の念仏者独漉をめぐって	長谷川匡俊	季刊日本思想史 二二
日本人の精神史の中の「切支丹」考―上―	水林澄雄	明治学院論叢 三五―四	指月慧印をめぐる人々	佐々木章格	宗学研究 二六
「キリシタン禁令」の研究	安野真幸	『日本近世史論叢』上	近世陰陽道の編成と組織	高埜利彦	『日本近世史論叢』下
			法道仙人と播磨の陰陽師	田中久夫	神女大史学 三
			吉野神宮と林柳齋	加藤隆久	神道史研究 三二―四
			幕末維新期に於ける民衆宗教の変容―不二道の場合	宮崎ふみ子	『日本近世史論叢』下
			幕末維新期における農民の時世観	大内寛隆	福大史学 三八

近世封建国家における民衆
の政治思想

森 嘉兵衛

岩手史学研究
六六・六七

幕末期における民衆の意識
と行動

本山 幸彦

京都大学教育学
部紀要 三〇

「ええじゃないか」試論—
三河国碧海郡刈谷町の場
合

藤井 誠

三河地域史研究
二

農村荒廃と杉山瀬兵衛—荒
村の思想

内田 和義

北下総地方誌一

近 代

明治国家における伝統思想
と近代思想

芳賀 登

歴史人類(筑波
大) 一二

「国民」の創出—国民文化
の形成・序説

飛鳥井 雅通

『国民文化の形
成』

国民像の形成と教育

小股 憲明

〃

天皇像の形成過程

佐々木 克

〃

津田真道の啓蒙的政治思想
について

松岡 八郎

法学新報 九一

中村正直『西国立志編』記
述にみる「実学」思想

藤原 暹

実学史研究 一

日本における S. Smiles「自
助論」受容の思想史的研究
—3—

Artes Liberales
(岩手大)三四

福沢諭吉における近代化と
儒教伝統—近代化の両義性
の問題

田所 光男

比較文学研究
四五

福沢諭吉における政治原理
思想構造と展開—「西欧近代」
思想導入との関連—2—

安西 敏三

甲南法学 二四

進歩がまだ希望であった頃
—日米比較精神史上の

平川 祐弘

新潮 八一

「フランクリン自伝」と
「福翁自伝」

福澤諭吉研究ノート—5—
「文明論之概略」の草稿
の考察

進藤 咲子

紀要(東京女大)
三四

福沢諭吉とB・ラッセル—
2—

山田顕義と祭神論争

野 阪 滋 男

紀要(茨城大・
人文) 一七

山田顕義と祭神論争

佐々木 聖 使

日大精神文化研
究所紀要
一五

「顕義と旧民法」の思想史
的評価

小野 健 知

〃

小野梓における人権論の展
開とその特質

出 原 政 雄

社会科学(同志
社大・人文研)
三三

中江兆民における民衆観—
「底辺・奈落・辺境」の
人々について

桐 村 彰 郎

法学雑誌(大阪
市大) 三一

三島通庸と国家の造形—象
徴としての都市と建築

井 上 章 一

『国民文化の形
成』

井上毅における宗教・道徳
・政治と教育

小 山 常 実

ばいであ(大
阪薬大) 八

井上毅と教育勅語—政治史
的背景

中 島 昭 三

法学新報 九一

山路愛山の思想形成と「辯
妄」—愛山旧蔵「辯妄」を
めぐって

山 本 幸 規

文化学年報(同
志社大) 三三

徳富蘇峰と植木枝盛—枝盛
の書簡から

高 野 静 子

日本歴史四三一

徳富蘇峰と志賀重昂—重昂の蘇峰宛書簡から	高野静子	史艸	二五	北一輝における「明治天皇シンボル」の一面—晩年の記述の分析を中心にして	竹山護夫	『日本近代の成立と展開』
那珂通世の辛酉革命説について	佐藤均	岩手史学研究	六八	北一輝「国家改造案原理大綱」の思想構造	岡本幸治	愛媛法学会雑誌 一〇
平和論の思想的構造—木下尚江と柏木義円	堀口節子	龍谷史壇	八四	柳田国男における政治論の特質—文化と歴史の研究—マ抄△特集▽	川田稔	日本福祉大紀要 五九
新渡戸稻造の「復権」	三輪公忠	ソフィア	三三	禅と世界—西田幾多郎と鈴木大拙	上田閑照	禅文化研紀要 一三
公開シンポジウム・福沢諭吉と新渡戸稻造—そのナショナルリズムとインターナショナルリズム	松沢弘 鼎陽	比較文化	三一—一	西田哲学における△弁証法的理論▽	中岡成文	思想 七二五
日本における「近代思想」受容の一典型—幸徳秋水	大原慧	国学院経済学	三二—二・三・四	三木清—1—「パスカルに於ける人間の研究」まで	饗庭孝男	理想 六一二
幸徳秋水の帝国主義認識とイギリス「ニューラディカリズム」	山田朗	日本史研究	二六五	三木清—2—アントロポロギーとマルクス主義	〃	理想 六一四
明治社会主義者・堺利彦	向井啓二	龍谷史壇	八四	三木清—3—「歴史哲学」と「技術哲学」	〃	理想 六一五
堺利彦の婦人・家庭論	〃	国史学研究(龍谷大)	一〇	三木清—4—「構想力の論理」と「親鸞」	〃	理想 六一六
福田徳三における『生存権論』の受容とその展開—明治憲法下における『生存権論』の一断面	清野幾久子	紀要(明治大院)	二一—一	昭和思想史における倫理と宗教—5—三木清と哲学的人間学の復権	峰島旭雄	早稻田商学 三〇五
宮沢賢治と国柱会—1—「撰折御文・僧俗御判」周辺	西勝	明治学院論叢	三五—四	三木清覚書—文化と歴史の研究—マ抄△特集▽	嶋田豊	日本福祉大紀要 五九
平林初之輔とその時代—3—プロレタリア文学論への道	渡辺和靖	愛知教育大研究報告・人文	三三	三木哲学における技術の概念	赤松常弘	人文科学論集(信州大) 一八
北一輝のアジア革命観	野村乙二郎	政治経済史学	二一〇	和辻倫理学における仏教受容	伊東洋一	季刊日本思想史 二二

和辻倫理学における「古寺巡礼」の位置 太田哲男 倫理学年報三三

羽仁史学における人民の役割 遠山茂樹 歴史学研究 五三〇

羽仁五郎の歴史思想と人民戦線 三輪泰史 歴史評論四一一

高群逸枝の思想と家族婚姻史研究 義江明子 歴史評論四〇七

宗教即哲学―滝沢克己の仕事について 八木誠一 理想 六一五

西田哲学とは何か―所謂東西の綜合の一考察 工藤亨 日本思想史学 一六

愛知県下における寺小屋教育の展開(一)(二)(三)―近代学校教育成立史研究(四)(五)(六) 野村知男 研究紀要(近畿大・教養) 一六一・二

明治初期における近世教育の繼承と批判 山中芳和 研究集録(岡山大・教育) 六六

尚友学舎と私学教育―藩校の解体と明治初期教育の一面 後藤重巳 別府大学紀要 二五

嚶鳴社と私法律学校―明治法律学校を中心として 福井淳 紀要(明治大・史) 四

嚶鳴社員官吏と「改正教育令」―島田三郎を中心として(自由民権運動へ特集) 〃 歴史学研究 五三五

国定教科書の期待した人間像―文部省唱歌のばあい 山住正己 国民教育 六〇

教育勅令主義への道―続日本の教育・一八八〇年―一八八六年(藤井孝夫教授退任記念号) 湯木洋一 神学研究 三二

教育勅語の渙発と芳川顕正 影山昇 愛媛大学教育学部紀要 第一部 三〇

明治末―大正初期の「立憲思想」―養成の要求と具体的展開―日本における公民教 新田和幸 北海道教育大学紀要 第一部C 三四

育史の基礎研究として 田平暢志 研究紀要(鹿児島短大) 三四

近代日本における国家観について 蘆澤宏生 紀要(実践女大) 二六

近代国家原理と旧「大日本帝國」体制における「國體」概念 佐々木隆 紀要(東大・新聞研) 三三二

明治時代の政治的コミュニケーション(一) 羽賀祥二 『国民文化の形成』

明治前期における愛国思想の形成―敬神愛国思想を中心として 園田英弘 〃

宮中席次の思想―明治前期社会階層秩序の形成過程 板垣哲夫 山形大学紀要 人文科学 一〇―三

維新後における岩倉具視の政治意識―国内政治について 〃 日本歴史四三〇

維新後における岩倉具視の對外意識 坂本多加雄 研究年報(学習院大・法) 一九

福地校痴と明治維新 大日方純夫 歴史学研究 五三五

自由民権期の政党・結社規制―天皇制国家と自由民権運動 〃 〃

〃 〃 〃

自由民権期の政党構想―自由
由・改進黨に即して
大日方 純夫
社会科学討究
(早大・社研)
二九―二

自由民権運動抑圧体制の編
成―首都警察機構の動向
松 沢 弘 陽
歴史評論四〇五

自由民権論の政治思想―覚
え書き
社会科学研究所
(東京大学社会
科学研究所)
三五―五

「上流の民権説」の政治的
性格―その国家主義的性格
をめぐって
本 田 成 章
国史学研究(龍
谷大)
一〇

宮廷側近グループと自由民
権運動―佐々木高行を中心
に
勝 田 政 治
紀要(文学研究
科)(早大・院)
別冊一〇

米国における自由民権運動
研究の最近の動向―ロジャ
ー・W・ボーウエン著
松 尾 章 一
歴史評論四一五

「明治日本における反乱
と民主主義」を中心に
自由民権百年と掘りおこし
運動―歴史教育とかかわら
せて
本 多 公 栄
〃

沖繩県における自由民権運
動
田 里 修
〃

土佐自由民権運動の主体と
要求
外 崎 光 広
〃

松江の民権政社について―
尚志社と笠津社の成立事
情を中心として
内 田 融
山陰史談 二一〇

岡山県における国会開設運
動の側面―『山陽新報』
主筆・小松原英太郎を中
心として
小 畑 隆 資
歴史評論四一五

安達憲忠伝(岡山県下の自
由民権運動―四―)
内 藤 二 郎
駒沢大学経営学
部研究紀要一四

岡山県下の自由民権運動―
山陽新報の論説・社説を
めぐる
〃
駒大経営研究
一五―三・四

明治一〇年代に展開した西
播の自由民権運動
安 藤 礼 二 郎
歴史と神戸
二二―一六

関西における民権政党の軌
跡―立憲政党小論
原 田 久 美 子
歴史評論四一五

自由民権期前半における北
陸の自由民権
森 山 誠 一
〃

民権運動草創期と最終段階
にみる関東の動向
新 井 勝 紘
〃

東北七州自由党の結成と憲
法起草運動
森 田 敏 彦
〃

北海道の自由民権運動
永 井 秀 夫
〃

自由民権革命と激化事件
江 村 栄 一
歴史学研究
五三―五

困民党の意識過程
安 丸 良 夫
思想 七二六

近代成立期の民衆運動・試
論―武相困民党の社会的願
望を中心に
鶴 卷 孝 雄
歴史学研究
五三―五

秩父事件像再構成のための
試論
稲 田 雅 洋
歴史評論四一五

秩父事件の評価をめぐって
―色川大吉氏の批判に答
えながら
森 山 軍 治 郎
歴史学研究
五三―五

自由党と星亨
麻 生 三 郎
歴史評論四一三

明治期における犬養毅の思
想と行動
時 任 英 人
政治経済史学
二一―五

田中正造における自治思想の展開
小松 裕
民衆史研究二六

地底の記録―二八―明治・大正・昭和を生きる―田中正造と自治の思想
石川 猶興
農政調査時報 三三八

田中正造の政治思想
南 敏雄
自由 二六―七

田中正造の思想―上―
花崎 泉平
世界 四六〇

田中正造の思想―下―
倉橋 克人
世界 四六一
基督教研究四六

報徳思想の展開と結社運動
並松 信久
農林業問題研究 二〇―一

大日本農道会についての覚書
大谷 正
『日本近代の成立と展開』
経済論集(新潟大) 三六

明治中期の農業革命思想―十文字信介『農事雑報』の歴史的意義
藤井 隆至
研究紀要(防衛医大進学課程) 七

吉野作造と明治憲法
慶野 義雄
研究紀要(橋女大) 一一
歴史評論四一一

大正デモクラシーとR・ブラウニング
多田 英次
研究紀要(橋女大) 一一
歴史評論四一一

大正期『主婦之友』と石川武美の思想
金子 幸子
『女性と文化』 Ⅲ

婦人矯風会に見る娼娼運動の思想―再び天皇制下の性と人間をめぐって
片野 真佐子
軍事史学 二〇―一

一九〇九年歩兵操典改正の思想
遠藤 芳信
軍事史学 二〇―一

日本におけるフアンズム型軍力構築の諸前提(上)(下)―陸海軍の軍事思想に及ぼした日露戦争の影響
山田 朗
人民の歴史学 八一―八二

八太舟三の無政府共産主義―反マルクス主義原理の構成
岡崎 正道
日本思想史研究 一六

天皇制国家と家族主義イデオロギーをめぐる一視角―日露戦後を中心に
見城 梯治
会報(日本思想史研究会) 三

皇国主義の言語体験
山中 恒
思想の科学第七次 五四

皇国主義の言語体系
寿岳 章子
軍事史学 二〇―一

原初皇道派の形成―宇垣軍縮と関連して
清家 基良
軍事史学 二〇―一

皇道派の精神構造―統制派と比較して
雨宮 昭一
紀要(茨城大・教養) 一六

大政翼賛会と職能国家論―支配の維持―変化と変革の契機
島川 雅史
史苑 四三―二

現人神と八紘一字の思想―満州国建国神廟
吉田 博司
紀要(八戸大) 三

国体明徴運動の精神的考察
寺脇 恵
『日本近代の成立と展開』 三

明治維新と郷村社
羽賀 祥二
日本史研究 二六四

神道国教制の形成―宣教師と天皇教権
加藤 隆久
『神道史論叢』

「福羽美静談話」にみる維新神祇行政の諸相
加藤 隆久
『神道史論叢』

近代神社制度の整備過程 (上) (下) 明治初期の 神社行政をめぐって	阪本是丸	紀要(国学院大 ・日本文化研) 五四・五五	日本初期プロテスタントイ ズムに及ぼした福音同盟会 の影響	中村 敏	キリスト教史学 三八
明治国家と招魂社体制 靖 国神社の成立と地方招魂 社行政	〃	神道学 一二二	赤心社とプロテスタントイ ズム	川崎 喜久子	紀要(関東学院 大・文) 四〇
神道国教化政策崩壊過程の 政治史的考察	高木博志	ヒストリア 一〇四	酒井勝軍の「神州天子国」 論(上) その日猶主義を 中心として	相沢源七	紀要(東北学院 大・東北文化研) 一五
国家と宗教 一七 不敬罪 による宗教弾圧	村上重良	法学セミナー 三五七	日本近代における新宗教教 団の展開過程 蓮門教の崩 壊要因の分析を通して	武田道生	研究論集(大正 大・院) 八
国家と宗教 一八 近代の 創建神社	〃	〃 三五八	櫻教に関して	坂田安儀	神道古典研究会 報 五
国家と宗教 二〇 昭和の 大札と神社対宗教	〃	〃 三六〇	黒住宗忠の教えについて	黒住忠明	〃
神道指令の成立過程に關す る一考察	高橋史朗	神道宗教 一一五	仏教の「厭世観」と社会的 活動 明治中期における仏 教的慈善の展開とその論 理形成について	山下憲昭	仏教史研究 一九・二〇
福島県における明治初期の 宗教政策	藤田定興	研究紀要(福島 県歴史資料館) 六	近代における真宗の教学路 線 とくに真俗二諦を中心 として	日野賢隆	〃
安井息軒の「辯妄」と明治 初年のキリスト教界	山本幸規	キリスト教社会 問題研究 三二	佐田介石の仏教経済論 近 代における封建仏教の例 錯	柏原裕泉	仏教史学研究 二七 一
排耶蘇と反猶太 近代日本 の排外思想	宮沢正典	社会科学討究 二九 二	戦時下の真宗教学	龍溪章雄	印度学仏教学研 究 三三 一
日本のキリスト教受容を めぐって 内村鑑三の場合	小川圭治	季刊日本思想史 二二	真宗教学者における歴史と 責任 教学者の戦争責任を めぐって	〃	真宗研究 二九
明治期のカトリックの諸相 とその一考察	松井千恵	研究紀要(白百 合女大) 二〇	阪本健一著『明治神道史の 研究』	井上順孝	宗教研究 五八 二
日清戦争とキリスト教(2) 『基督教新聞』と『福 音新報』を中心として	杉井六郎	キリスト教社会 問題研究 三二			

永原慶二著『皇国史観』 龍福義友 史学雑誌 九三―二

坂井雄吉著『井上毅と明治国家』 伊藤弥彦 史学雑誌 九三―六

坂井雄吉『井上毅と明治国家』 石井紫郎 年報近代日本研究 六

比屋根照夫『自由民権思想と沖繩』 ひろたまさき 歴史学 五三五

中村政則著『日本近代と民衆』 布川弘 日本史研究 二六七

土方和雄著『日本文化論』と天皇制イデオロギー』 山口和孝 季刊科学と思想 五二

補遺

古代巫政国家論―オホ臣氏をめぐって 山上伊豆母 紀要(帝塚山大) 二〇〇

古事記における「削偽定実」の事例―2―敏達天皇系譜記事の考察―1― 梅沢伊勢三 古事記年報 二五

村松家行の神観念について―天讓日天狹霧国禅日国狹霧尊を中心に 安藤谷正彦 神道宗教 一一三

専修念仏信仰の展開―中世の記録を中心として 景山春樹 紀要(帝塚山大) 二〇〇

蘭学者神田孝平の教育・啓蒙活動 岩田高明 紀要(広島大・教育) 三三二

福沢諭吉の儒教批判に関する一考察 佐伯友弘 鳥取大学教育学部研究報告 二二五

自由民権運動昂揚期の共存同衆講談会とその思想 沢大洋 行動科学研究 一七一―一

海老名弾正におけるキリスト教受容―神観を中心として 関岡一成 神戸外大論叢 三四―五

小野梓の共存同衆初期における政治思想―共存同衆とその政治思想―六 沢大洋 東海大学紀要 政治経済学部 一五

大川周明における改革思想の形成と本質 刈田徹 独協法学 二〇

大杉栄の革命思想 岩淵慶一 立正大学人文科学研究所年報別冊 四

ニヒリズムに関する一試論―ニヒリズム思想の日本移入をめぐって 手川誠士郎 //

柳田国男におけるナショナルリズムの問題 橋川俊忠 神奈川法学 一九―一

歴史の中の政治学 山室信一 社会科学の方法 一六一―一・二一

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳蠟をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究 第十九号

昭和六十二年三月十五日 印刷
昭和六十二年三月二十五日 発行

編集代表者 玉 懸 博 之

仙台市日の出町二丁目四ノ一

印刷所 (株) 仙台共同印刷

仙台市川内

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室

